

令和7年度事業報告(音楽)

自 令和7年4月1日

至 令和8年3月31日

公益目的事業3 (顕彰事業)

1. 「第56回サントリー音楽賞」「第24回佐治敬三賞」(2024年度)の贈賞

令和7年2月27日(木)(音楽賞)・1月26日(日)(佐治敬三賞)選考会でそれぞれ選定のうえ、「第56回サントリー音楽賞」に山田和樹(指揮)を、「第24回佐治敬三賞」には《山本昌史コントラバス・ソロ-The Unplugged Theatre-》と《田中悠美子リサイタル 2024~義太夫三味線の音響世界》を、3月17日(月)理事会にて決定後、6月25日(水)16時よりサントリーホール・ブルーローズにて贈賞式を開催し、賞金700万円(サントリー音楽賞)、賞金200万円(佐治敬三賞・各100万円)を贈呈。贈賞式に引き続き、同じくサントリーホール・ブルーローズで祝賀会を実施。

2. 「第57回サントリー音楽賞」の選定

ア. 選考過程

- (1) 令和8年1月11日(日)に、選考委員8名による第57回「サントリー音楽賞」の第1次「候補者選考会」を国際文化会館に於いて開催した。
- (2) その結果、2025年にわが国の洋楽の発展に優れた業績をあげた人々として、候補者を選定した。
- (3) 引き続き令和8年2月15日(日)に「受賞者選考会」を国際文化会館に於いて開催した。選考委員8名による慎重な審議の結果、「第57回サントリー音楽賞」に、佐藤 俊介氏が選定された。
- (4) 3月11日(水)の理事会において、正式に「第57回サントリー音楽賞」は、**佐藤 俊介氏(ヴァイオリン/指揮)**に決定した。

イ. 贈賞理由

古楽か、モダンか。佐藤俊介は、そうした問いや対立を、過去のものにする可能性を秘めたパイオニアである。

奏法、楽譜、楽器、そうした過去のものに対する敬意と健やかな好奇心を、無限の創造の糧とする。そんな古楽の究極の目的は、人間の普遍性の探究といえるだろう。国境や時代を超え、「人間」そのものを掘り下げる。ゆえに、多様性の宝庫となる。

佐藤は10代の頃、米国で古楽への関心を抱いた。研鑽ののち、今は古楽器とモダン楽器の両方を、分け隔てなく自身の声としている。卓越した国際感覚と語学力も、世界中の音楽家との柔軟なコミュニケーションを促進する礎となった。オランダ・バッハ協会第6代芸術監督を経て、演奏、指揮、指導、教育を通じ、世界各地で自らを飛躍させつつ、次代の才能を育てている。

そうした歩みが昨今、日本の音楽シーンにもさまざまな恵みをもたらしている。

東京交響楽団への客演は、聴衆以上に奏者たちにセンセーショナルな目覚めをもたらした。東京藝大チェンバーオーケストラへの指導、およびみずみずしい即興精神にあふれるスリリングな弾き振りは、若い奏者たちの視野を大きく世界へと開かせ、音楽に生きる人生の幸福を再認識させるものとなった。フォルテピアノのスーアン・チャイと各地で敢行したベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタ全曲演奏も、遊び心と挑戦心を前面に出し、受け身ではない能動的な「聴き方」を聴衆に提案。音楽業界を大いに触発した。

そして昨年、満を持してロマン派以降の音楽を主な対象とする古楽オーケストラ「Past Forward Ensemble (PFE)」を創設。今年5月、独ケルンで船出する。過去へと向かう探究心を、未来を編む力とする。そんな志を託された名称の通り、あらゆる偏見や先入観を取り払い、より自由な精神で、音楽と人々を連れてゆくことを目指している。

分断に歪み、混迷を深めるいまの時代において、佐藤は芸術家にしかできないことをきわめてアクチュアルに示し続けている。楽しむだけではなく、思考を突き動かすためにこそ、音楽を。今回の贈賞は、そうした佐藤のビジョンを照らし、クラシック音楽の未来の一翼を担うひとりとして、今後の歩みへの期待を示すものである。

- ウ. 選考委員 伊東信宏、柿沼敏江、片山杜秀、鈴木雅明、寺西基之、船木篤也、松本良一、吉田純子
- エ. 賞金 700万円
- オ. 贈賞 令和8年9月29日(火)

3. 「第25回佐治敬三賞」の選定

ア. 選考過程

- (1) 令和6年9月1日～10月31日および令和7年3月1日～4月30日の2回の募集期間に令和7年1月1日～12月31日(上期、下期)に実施される音楽公演についての応募を受け付けたところ、78企画についての応募があった。応募公演について選考委員9名が分担し公演の視察を行った。
- (2) 令和8年2月23日(月・祝)、「第25回佐治敬三賞」選考会を芸術財団会議室にて開催し、選考委員9名による慎重かつ白熱した審議の結果、「第25回佐治敬三賞」受賞公演に、《日野浩志郎新作音楽公演「Chronograffiti (クロノグラフィティ)」》が選定された。
- (3) 3月11日(水)の理事会において、正式に「第25回佐治敬三賞」の受賞公演に、《日野浩志郎新作音楽公演「Chronograffiti (クロノグラフィティ)」》が決定した。

イ. 公演概要

日時：7月25日(金) 19:30開演、7月26日(土) 14:30開演/19:30開演、7月27日(日) 14:30開演
会場：クリエイティブセンター大阪内 Black Chamber (大阪市住之江区)
曲目：Bongo Trio - Taiko Solo - Loose Ends - Permutation
出演：前田剛史、谷口かな、安藤巴(打楽器)
作曲：日野浩志郎
ビジュアルエフェクト：古舘 健
主催：株式会社鳥友会

ウ. 贈賞理由

《Chronograffiti》は、打楽器トリオないし和太鼓ソロ、そして最小限の照明というミニマルな手段から、音響・視覚・身体振動を統合した驚異的な没入体験をつくり上げた。作曲は実験的バンド「goat」の主宰者として主に知られる日野浩志郎。2025年6月にドイツの「Moers Festival」で初演された作品を、「Black Chamber」(クリエイティブセンター大阪)の音響を前提に改訂したものである。第1曲〈Bongo Trio〉(ボンゴ三重奏)、第2曲〈Taiko Solo〉(和太鼓ソロ)、第3曲〈Loose Ends〉(三重奏：ボンゴ・コンガのセット×3)、第4曲〈Permutation〉(三重奏：ボンゴ・コンガ・タムのセット×3)から構成される。なお、第3曲は改訂に際して書き下ろされたもので、初演時の曲目であったスnea・デュオの作品を差し替えるかたちで追加された。ビジュアルエフェクトは古舘健。演奏はクラシック・現代音楽の打楽器奏者である

谷口かなと安藤巴、そして鼓童出身の前田剛史。異なるバックグラウンドをもつ奏者が共演する点も、本作の強度を支えている。

本公演がとりわけ賞賛を集めたのは、「その場の体験」としての圧倒的な完成度の高さである。会場の選択からして特筆に値する。雑多なエリアを抜けた先、大阪港に接した廃工場を改装した小ホール——場末めいた暗闇の中から、音響・視覚の両面から呪術的ともいうべき異世界が立ち上がる。ストロボライトによって奏者の動作が断片的に像を結ぶかと思えば、ボンゴの微細な倍音が頭上にちらつき、和太鼓ソロでは振動が身体の深部にまで突き刺さる。それは何の説明も要しない「ストレートなかつこよさ」の極限であり、それだけに、どのような人々をも圧倒する力をもつ。

一方で、公演記録映像のみを鑑賞した選考委員からは、純粋な打楽器作品としての新しさが捉えにくいという意見も出た。しかしそれは、現地で体験に焦点を当てた本作が、動画のフレームに収まりえない強烈な臨場感をもつことの裏返しでもある。実際、会場に足を運んだ選考委員4名からの評価は一致して高かった。なかでも第1曲〈Bongo Trio〉では、残響の変化が精妙にコントロールされ、電子音響にも似た倍音が生み出されるのだが、この種の繊細な効果はまさに現地でしか体験できないものだろう。こうした点から、本作が音楽面においても十分に新しいと確認されたことも、受賞を大きく後押しした。

最後に触れておきたいのは、客席の多くを、昨今の芸術音楽の公演では相対的に少なくなりがちな若い世代の来場者が占めていたことである。日野作品が幅広い層へとリーチし、新しい聴衆を切り開くポテンシャルを示すものといえるだろう。日野浩志郎氏ならびに出演者・スタッフの今後の活動にも大きな期待を抱かせる、極めて優れた公演であった。

- エ. 選考委員 浅井佑太、伊藤制子、岡田暁生、小室敬幸、白石美雪、長木誠司、沼野雄司、野々村禎彦、水野みか子
- オ. 賞金 200万円
- カ. 贈賞 令和8年9月29日(火)

4. 「第35回芥川也寸志サントリー作曲賞」の選考、決定、贈賞

2024年1月1日から12月31日の間に国内外で初演された新進日本人作曲家による管弦楽作品の中で最も清新かつ豊かな将来性を内包する作品を選定。楽譜と音源による一次選考を経て、最終選考は「サントリーホール サマーフェスティバル 2025」の一環として、公開の場で行った。

ア. 第1次選考会

令和7年3月5日(水)に開催し、第35回芥川也寸志サントリー作曲賞の選考対象となる候補作品について譜面および録音による選考を行い、候補作品3曲を選出した。

イ. 「第35回芥川也寸志サントリー作曲賞」選考演奏会

令和7年8月30日(土) 15:00～、サントリーホール 大ホール

サントリーホール サマーフェスティバルの一環として開催。第33回本賞受賞者である向井航氏による当団委嘱作品を初演したのち、候補作品を演奏し、演奏終了後、3人の選考委員が公開による選考で1曲を選定し、「第35回芥川也寸志サントリー作曲賞」(賞金150万円)を **松本淳一作曲の『空間刺繍ノサエティ』**に決定、贈賞した。選考委員は伊左直直・小出稚子・安良岡章夫の3氏、選考会司会は長木誠司氏。なお、受賞作曲家には新作を委嘱(委嘱料100万円)し、完成後、当財団主催の演奏会で初演する。

公益目的事業 4（助成事業）

1. 佐治敬三賞推薦コンサート活動

佐治敬三賞応募公演の中から、一部を紹介し実際に聴いてもらう機会を提供するために、佐治敬三賞推薦コンサートとして選定、チケットプレゼントを行った。

令和7年度は、第25回佐治敬三賞応募公演のうち令和7年4～12月開催公演から推薦された23公演を、ホームページなどで告知募集し、抽選により各公演3～12名を招待した。

2. 学生向け楽器貸与

世界的文化遺産である弦楽器名器を保全し次世代に継承するとともに、若手音楽家の育成、クラシック音楽の発展に貢献することを目的に、学生向け楽器貸与を行った。

12回目となる本年度は、横浜みなとみらいホール 小ホール（横浜市）にて実施された「第79回全日本学生音楽コンクール全国大会」バイオリン部門中学校の部（11月30日）・高校の部（12月1日）（主催：毎日新聞社）において、選定委員が「第12回サントリー芸術財団名器特別賞」受賞者を選定した。財団所蔵のバイオリン1挺について受賞者への無償貸与を令和8年1月より開始した。

ア. 「第12回サントリー芸術財団名器特別賞」受賞者および貸与楽器

濱田理誉（はまだ としたか） JEAN-BAPTISTE VUILLAUME（1855年製）バイオリン

イ. 選定委員 梅津時比古（毎日新聞社 特別編集委員）

南敦子（毎日新聞社 文化事業部長）

石井志都子（音楽家、全日本学生音楽コンクール諮問委員）

辰巳明子（音楽家、桐朋学園大学・桐朋学園大学院大学学長）

藤原浜雄（音楽家）

田中徹（サントリー芸術財団専務理事）

ウ. 貸出期間 3年間

3. 演奏家向け楽器貸与

世界的文化遺産である弦楽器名器を保全し次世代に継承するとともに、若手音楽家の更なる活躍、ひいてはクラシック音楽の発展に貢献することを目的に、演奏家向け楽器貸与を開始した。

ア. 貸与楽器および貸与者

①PIETRO GIACOMO ROGERI（1710年製作 チェロ） 一水野優也

②ANTONIO STRADIVARI（1727年製作 バイオリン） 一前田妃奈

③PAOLO ANTONIO TESTORE（1728年製作 ヴィオラ） 一杉田恵理

イ. 選定委員 磯村和英、澤和樹、山崎伸子 の3氏

ウ. 貸与時期 5年間

4. その他の助成

ア. 活動助成 (1) 東京国際ヴィオラコンクール

イ. 運営助成 (1) 日本作曲家協議会 (2) 日本現代音楽協会 (3) 日本演奏連盟

以 上